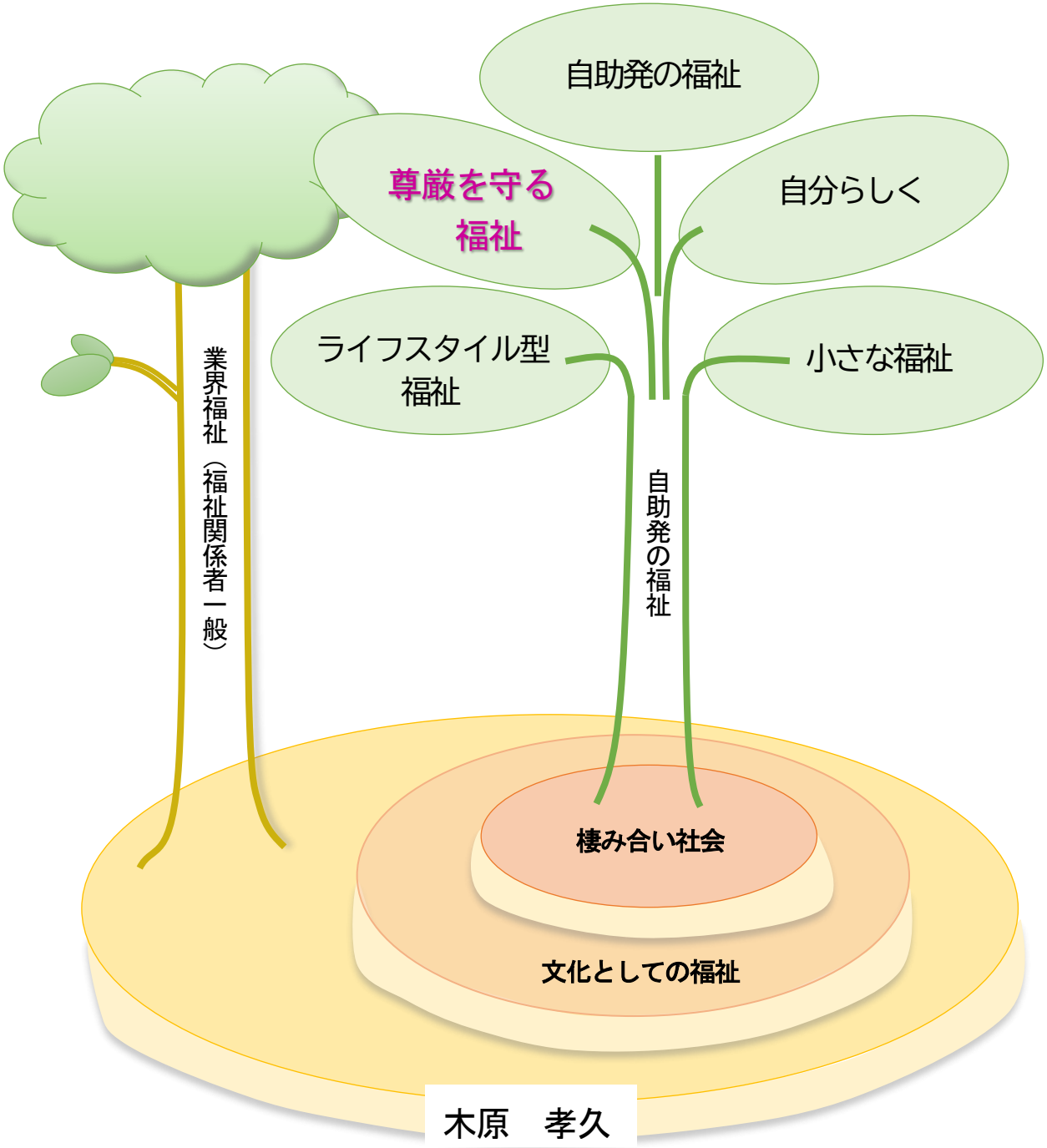
第2章

尊厳を守る福祉



木原　孝久

住民流福祉総合研究所

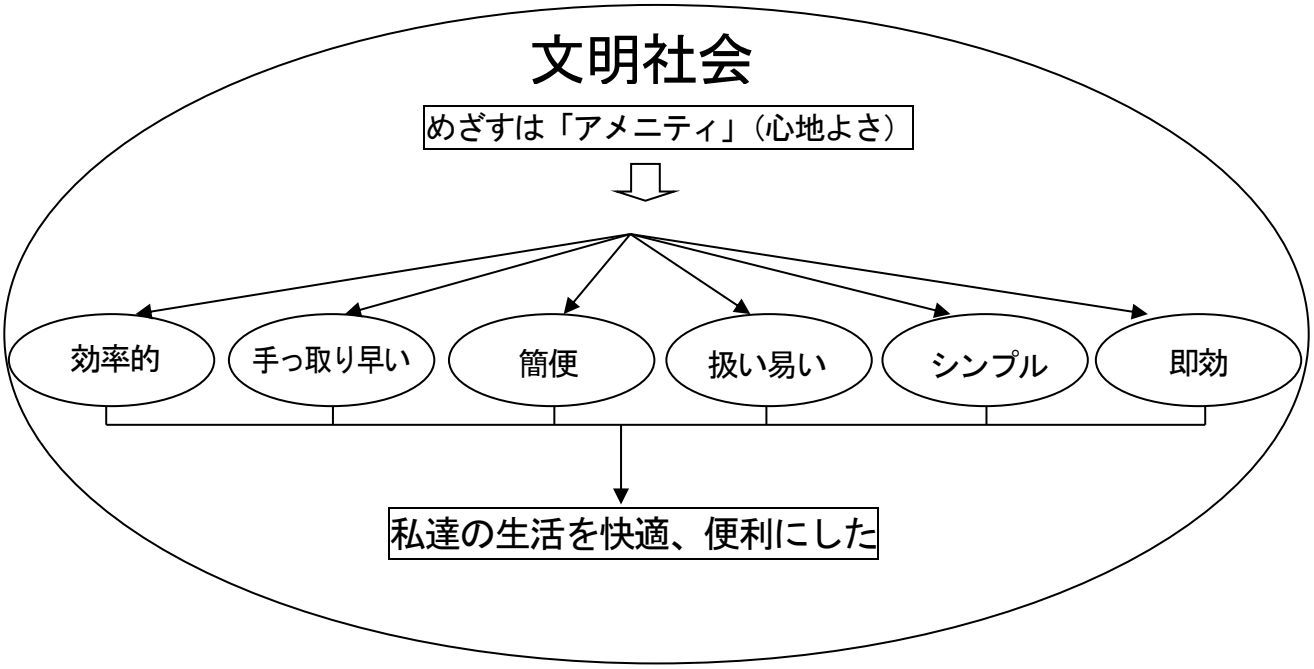
目次

1.文明は福祉に何をしたのか？／３
2.当事者の都合で福祉を作り直す／６
3.当事者の尊厳を傷つけない方法／１０
4.当事者が主導権を握るメリット／１９

1.文明は福祉に何をしたのか？

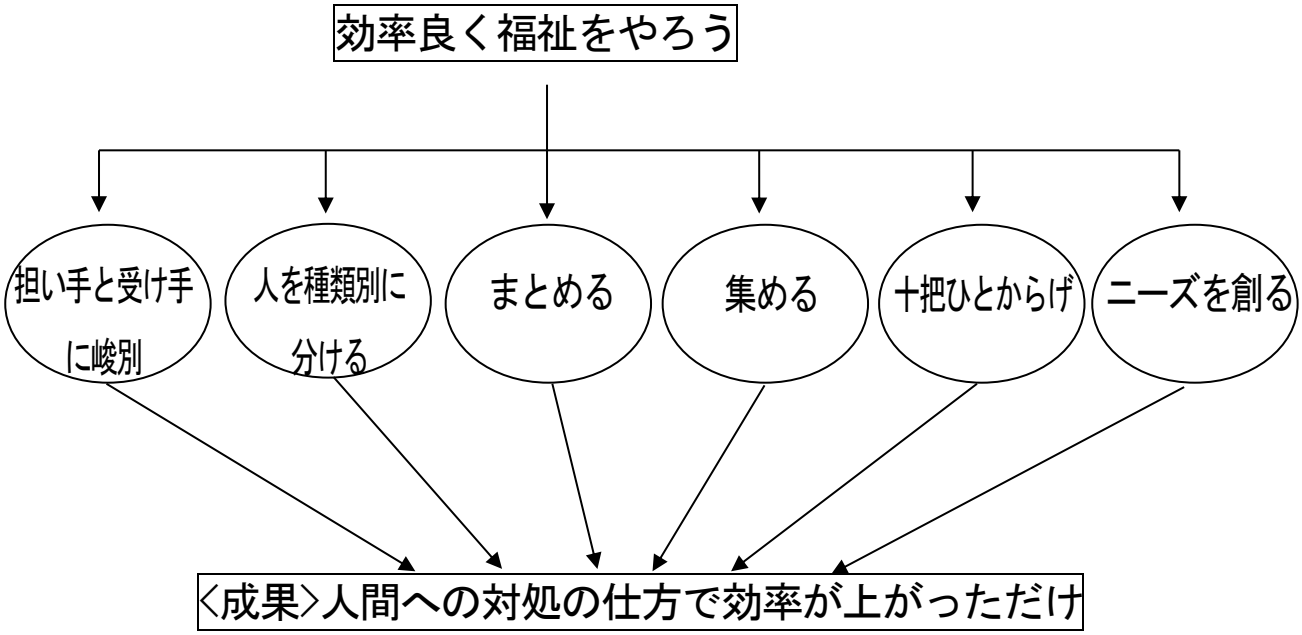
⑴文明は心地よい社会づくりに貢献してきたが…

今は文明社会。文明は、人間にとって心地よい社会を目指して、それに都合の良いあり方を人間に提案し、そのための道具などを提供してきた。**キーワードは、簡便、手っ取り早い、すぐ効く、シンプル、効率がいい**など。この要件に合致するあり方は、みんな良いということになる。おかげで私たちの生活は快適になり、便利にもなった。



⑵効率の良いやり方を人間の扱いにも応用してしまった

たしかにモノや機械を操作するときはそれでいいが、私たちは人を扱う時にも、この手法を取り入れてしまった。次の図にあるように、効率を求めて、対象の扱いをこのようにしたのだ。



効率を目指すため、担い手と受け手を峻別し、さらに受け手を障害の種類や介護度で分けて、まとめたり、1か所に集めて、十把ひとからげのサービスをする。この結果、効率が上がったとしても、それは対象者ではなく、推進者や担い手にとって効率が上がったにすぎないのだ。

⑶効率主義は、人間の尊厳を傷つけることを宿命づけられていた

こういう扱いをして、相手の尊厳を守ることなど、できるはずがない。文明社会に共通の効率主義に基づいて進めてきた福祉は、初めから人間の尊厳を傷つけることを宿命づけられていた。

①福祉を推進する側にとっての「効率」だった

効率と言うが、それはだれにとっての効率なのか。ここが文明の巧妙なところだが、それを推進する存在は、対象の上に置かれる。福祉も、担い手と受け手を峻別するとともに、担い手が指示をして、受け手は担い手に従う立場になった。福祉の対象者は、推進者と担い手の二者から「支配」されることとなった。福祉は、推進者と担い手に都合の良い福祉になるべくしてなったのだ。

福祉の推進役（推進役が決めるとおりに）

↓

福祉の担い手（担い手がやり易いように）

↓

福祉の受け手（二者から支配される立場に）

②文明流の代行者・行政官僚が社会の末端にまで浸透させる

効率的でやり易い福祉をつくることが目的になれば、対象者の尊厳は守られない。尊厳を守るということは、手間暇がかかるのだ。

こうして福祉は、まず厚労省から地方自治体まで、行政官僚が自分たちのやり易い福祉を構築し、それを地域の末端にまで行き渡らせる。

③効率福祉の副作用が施設職員による入所者への虐待

たしかに効率は上がったものの、福祉や教育の現場では、あることが起きている。効率福祉の副作用だ。高齢者や障害者の施設では、日常的に、施設職員による入所者への残酷な虐待が行われている。

「絶対的権力は、絶対的に腐敗する」と、ローマの哲学者が、既に紀元前に喝破していた。効率的な「縦の関係」でシステムを作り、超強者と超弱者を密室で対峙させれば、必然的に虐待は起きるのである。

⑷自分もまた効率的な扱いを受けることに疑問はないのか

文明は、生活を便利にはしてくれるが、人間を扱う場面には使ってはいけないのだ。不思議に思われるのは、私たち１人ひとりが、自分もまた効率的な扱いを受けることに疑問はないのかということだが、粗略な扱いを受けていても、周りの人たちのほとんどがそういう扱いを受けていると、尊厳が傷つけられたとは思わなくなるのだ。

2.当事者の都合で福祉を作り直す

当事者の尊厳を守るために、今の福祉を変える大事なポイントは、推進者や担い手の都合でつくられている福祉をひっくり返して、受け手(当事者)の都合でつくり直すことである。従来の福祉は脇へ置いておいて、もっぱら当事者の側の立場から福祉をつくり直していくのもいいが、それでは現状を変えることはできにくい。思い切って、住民の活動にも挑戦していく必要がある。

⑴「子ども食堂」を当事者の側からつくり直してみる

元になるのは、効率を重視したやり方（担い手流）だ。推進者を決め、担い手と受け手を分け、受け手を更に障害や要介護度などで分ける。そしてその分け方に従ってその人たちをまとめて、特定の場所に集め、そこで担い手が関わる。

このやり方をすべて引っ繰り返したのが、次頁の中央の欄（受け手流）である。特定の場所にたくさんの親子を集めて食事を提供するというやり方はとらない。それぞれの親子が、地域から自分たちのニーズに対応してくれそうな人材を発掘して、一緒に食事の問題に取り組むということになる。

例えば同じシングルマザーで状況が似ている人や気が合う相手を選び、普段からさまざまな目的でおつき合いする。その中で、相手が作ってくれた食事をご馳走になるかもしれないし、その反対の場合もある。

ここでは子ども食堂を取り上げたが，この中の右端の欄を空白にして、別の活動を入れてもいい。

「子ども食堂」を当事者に都合の良いやり方で

担い手流	受け手流	受け手流の具体的なやり方
①活動の推進者を決める	推進者は当事者たちの共同活動	親子が集まり、共同で活動を企画する。一緒に作り、一緒に食べる
②担い手と受け手に分ける。担い手が主導	担い手と受け手に区分けしない。当事者が主導へ	それぞれが担い手にも受け手にもなっていい。子どもが料理を作ってもいい
③障害の種類や世代で対象を分ける	対象毎に分けない	子どもに限定しない。中高生でも大人でもいい。高齢者が参加してもいい。
④対象毎にまとめる。	まとめない。１人ひとりバラバラ	個々の親子が自分の見込んだ所でニーズを充足してもいい
⑤特定の場所に対象者を集める	集めない	個々の親子が各自、自分たちのニーズに合った資源の所で充足する
⑥担い手を発掘して研修	特別に担い手探しをしない	個々の親子が自分たちで資源を探す
⑦対象者にサービスする	一方的サービスにはしない	担い手と受け手が一緒に食事を作り、一緒に食べる
⑧十把ひとからげのサービス	１人ひとりのニーズに合わせたサービス	個々の親子が各自料理を作る。又は各自が見込んだ資源の所で食べる

⑵担い手主導をこう変える

担い手主導のやり方（①～⑧）をどう変えるのか。前頁の表を例として見ながらお読みいただきたい。

①「活動の推進者を決める」

→福祉関係者も、一般住民もそうだが、活動を企画し、その内容を考えるのは自分たちだと初めから決めてしまっている。それを認めてしまったら、あとは一気に担い手主導で進めることになる。

活動を始めようという時に、対象者をイメージしたり、数名の対象者を話し合いに加える場合がある。その段階から、当事者は、本来は自分たちが主導するのだということを示唆する必要がある。

自分たちは対象者に過ぎないのだから、担い手に任せればいいといった受け身の姿勢ではなく、まずは企画会議に参加し、当事者の側から意見を出すといったことから始めたらどうか。

②「担い手と受け手に分ける」

→活動をする時に、まずは担い手と受け手に分けようとするが、これを変えていくには、当事者の側も、自分はお客さんなのだという意識ではなく、自分たちもまた担い手なのだという意識で、自分たちの意見を出したり、活動のあり方にも声を出していく。「皆さんは受け手ですよ」という圧力を受けても、それに負けずに、どんどん活動を進めてしまうのである。

③「障害の種類や世代で対象を分ける」

→「子ども食堂」といった言葉をはじめに使ってしまうと、そのまま子ども対象に絞った活動になってしまう。どこかの段階で、たとえば一人暮らし高齢者にも入ってもらえば、子どもたちも喜ぶだろうし、出来る人は調理にも参加してもらえば、はり

きって作ってくれるだろう。

公的機関やそれに近い組織が主催すると特に、対象ややり方が固定された活動になりやすい。住民同士でだれかの家を使ってやろうとすれば、そういう硬直した発想は出てこないはずだ。

④「対象毎にまとめる」

→対象ごとにまとめるのでなく、１人ひとりを個別の存在として考える。そうすると、活動も全く異なったものになっていく。本来は１人ひとり異なったニーズなのだから、個別のやり方が正しいのだ。

⑤「特定の場所に対象者を集める」

→福祉活動をするとなると、相手を集めようとする。集めるという発想になると、特定の対象者を特定の場所に集めて一律のサービスをするというように、その後のやり方が決定されてしまう。前項と同じように、1 人ひとり異なるニーズを持つ人として考えれば、全員を１ヵ所に集めるという発想にはならない。

⑥「担い手を発掘して研修」

→これは通常、公的機関がとる方法だが、活動は決まりきった方法になってしまうし、対象者も同じようにして縛られてしまうはずだ。どこかで「手上げ」方式にしないといけない。そういう人がいれば、ストレートに「研修」に進むことはないはずだ。

⑦「対象者にサービスする」

→これでは当事者は受け手一方の存在にされてしまう。それだけでなく、もっと問題なのは、サービスの質やレベルまで担い手が決める水準に規定されてしまうことだ。詳しくは後で説明するが、これが当事者の尊厳を傷つける基にもなるのだ。

⑧「十把ひとからげのサービス」

→十把ひとからげのサービスになってしまうことを、相手がたくさんいるのでやむを得ないと言う人が少なくないが、それは担い手の理屈であって、十把ひとからげにしたくないのなら、１人ひとりに異なったサービスができるようにすべきなのだ。

１人ひとりに合ったサービスとなると、すべてのやり方を変えなければならない。それをすればいいことなのだ。そのために必要なのは、受け手の側がもっと積極的に参加することである。

3.当事者の尊厳を傷つけない方法

⑴担い手と受け手の区分けをやめる

福祉関係者は、まず担い手と受け手を区分けすることから始めるが、当事者からすれば、これこそが当人の誇りを傷つけている。

人には心の貸借対照表があり、貸借の均衡が偏らないようにしている。要介護でも、サービスを受ける一方では困る。担い手になれる機会を作ってあげる。要介護度の高い人ほどボランティア・チャンスを提供すべきだ。

①世話焼きの認知症の利用者をスタッフに取り立て

あるデイサービスセンターでのこと。若年性認知症の男性で、他の利用者の世話を焼いている人がいた。この人をスタッフに取り立てた。いずれ認知症が進行していけば、その時は再び利用者に戻ってもらう。スタッフと利用者の間を自由に往還できる状態にしたのだ。

担い手と受け手の役割分担をやめてみたらどうか。組織の中で、担い手と受け手に区分けしないのだ。それぞれが自由に、どちらの役をやってもいい。

②「今日は私は担い手になってみよう」

そうすると、各自が自分用の貸借対照表を携帯しながら、「今日は私は何をしようか。受け手になってみるか、たまには担い手になってみるか」と考える。

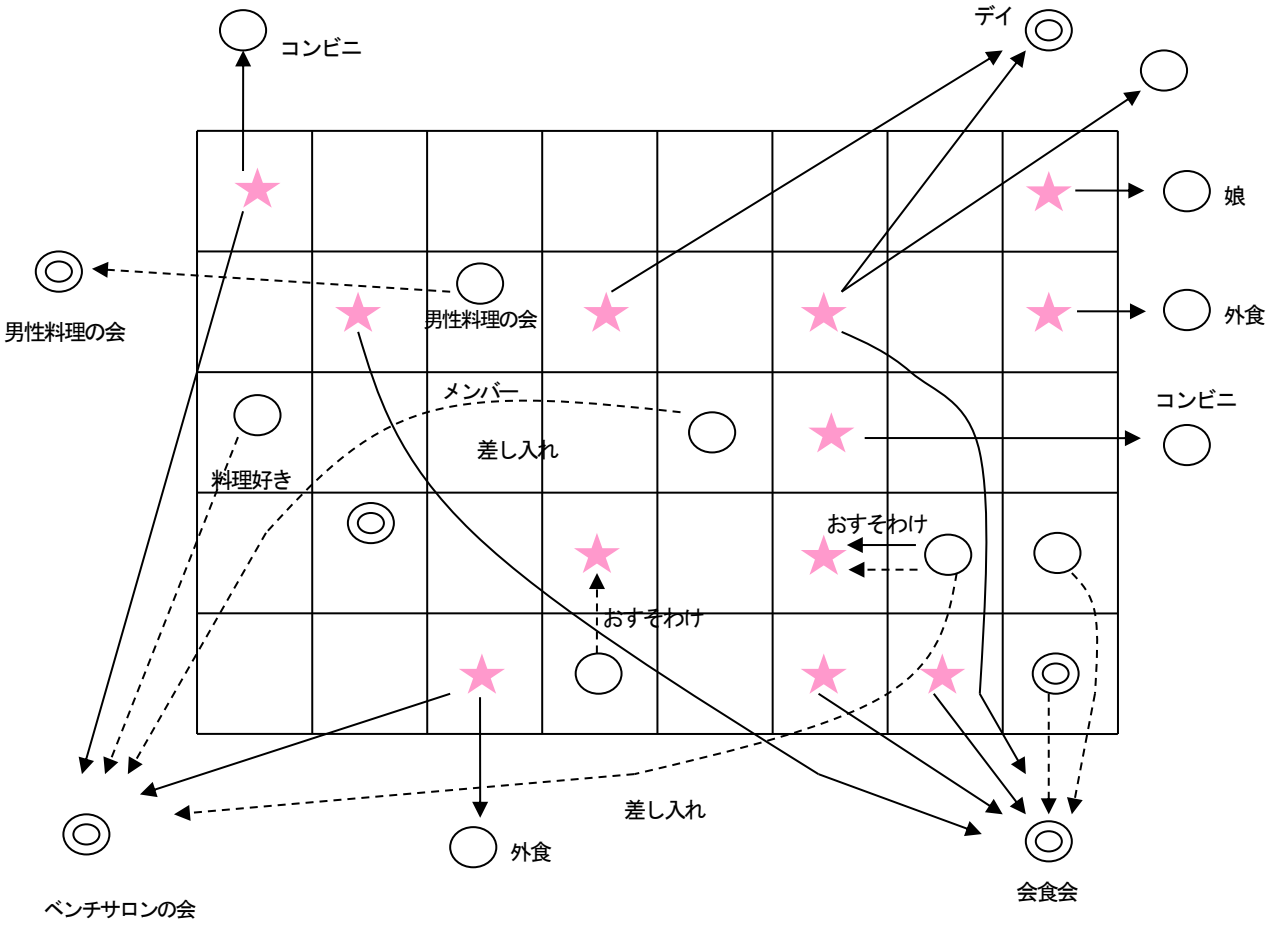
助けてもらうのは、負債が増える部分かもしれないが、その時に相手にやりやすい助け方を教えたりすれば、その部分は資本の方に入る。「助ける」と「助けられる」の意味を柔軟に捉えると、だれでもどちら側にも立てる。

⑵皆がニーズだという捉え方

①各自固有のニーズを持つ人を結び合わせる

「子ども食堂」を考える場合、食のニーズを持つ人と資源を持つ人に区分けするのではなく、みんながそれぞれ固有のニーズを持っていて、それらを結び合えば、それぞれの問題が解決するという発想を取り入れてみたらどうなるか。

次のマップを見ていただきたい。小さな団地で、食のニーズを持つ人（★）と、食の資源を持つ人を調べてみた。



②あるのは資源とニーズでなく、多様なニーズのみ

このマップで、差し入れやおすそ分けをしたり、会食会をしている人たちも、見方を変えれば「もう１つの福祉ニーズ」と言えまいか。自分の作ったものをだれかに食べてほしい、というニーズである。そう考えたら、地域にあるのは「ニーズ」だけだとも言える。

さまざまな食事のニーズ

①食事をしたい。誰かが提供してくれないか。

②私の作ったものを、誰かに食べてもらいたい。

③私の料理の腕を生かすチャンスがほしい。

④私と一緒に食事をしてくれる人がほしい。

⑤料理の仕方を教えてくれる人はいないか。

自分の食のニーズはこの５つの中のどれに当たるのかをチェックする。その上で、どういうニーズを持った人と結びつけば、お互いがハッピーになれるのかを考える。例えばシングルマザーの場合、②はそのまま生かせるし、④も子どもがいるからこそ、相手の一人暮らし高齢者などに喜ばれるはずだ。

③「助け合いマーケット」でニーズ同士が交渉

地域のさまざまな食のニーズがうまく結び合うように交渉する「助け合いマーケット」があればいい。小地域ごとにある井戸端会議やサロンなどが「マーケット」の役割を果たすことができる。本当の助け合いは、こういうことではないのか。

⑵要援護者をこそ担い手に

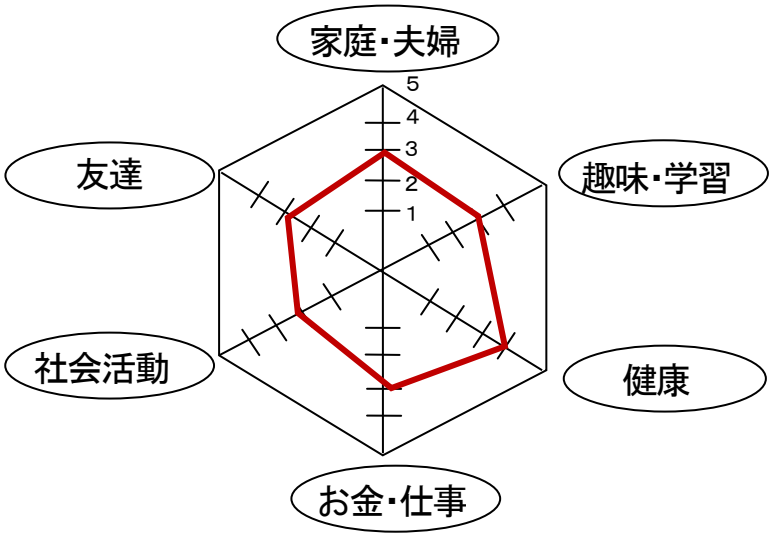
①人のために行動すれば、自身に治療効果が

ヘルパーセラピーという言葉がある。人のために行動すれば、自身に治療効果があるということだ。アメリカでは、どうしても飲酒をやめられない人に対して、他のやめられない人に「やめなさい」と意見する役をさせる。すると、意見をした方が、やめることができるという。タバコも同じだ。

日本人は、「自分の頭のハエも追えないくせに」という言い方をするが、これは間違いであった。自分の頭のハエを追えない時は、そのハエはちょっと脇に置いて、他の人のハエを追うのだ。すると、いつの間にか自分の頭のハエもいなくなる。

②ボランティアという位置づけにすればいい

サービスを受けることを嫌がる人を無理やり利用者にするのでなく、ボランティアという位置づけにすればいいのだ。デイサービスボランティア、施設ボランティアという位置づけにしてあげる。



ただこちらがやってもらいたい活動を提示するかわりに、本人の豊かさダイヤグラムから、どんな活動をしたらいいかを割り出してもいい。そこで、１人ひとりの豊かさダイヤグラムを作る。６つの項目の１つ１つについて充足度を測り、それを結べば、その人の現在の豊かさ状況ということになる。

問題は「社会活動」だ。これを充足させるには、どうしたらいいのか。「おむつたたみの手伝い」といった、こちらが提示したものだけでなく、ダイヤグラムから割り出されたその人らしい活動もあるといい。その時に使える発想の１つが、その人のマイナスだと思われている特性を生かすというものだ。

⑶「障害を持つ」じつは「能力がある」

日本人は、その人が障害を持っていたり、病気だと分かると、途端に「何もできない人」と見てしまう。人が障害や病気を隠す理由の１つだ。だから、障害を持っていても、できることがあるというのは、極めて重要なポイントになる。

①「天井のシミが気になる」は、「印刷ミスを瞬時に見つける特殊技能」

そんな時に、新しい発想がこの世界で生まれてきた。障害特性は、じつは能力でもあったというのである。これこそ本人の尊厳を取り戻せる最高の発想ではないか。

ある自閉症の青年が、天井の小さなシミが気になるのは、障害の特性だ。ところが、この特性はその利用の仕方で意味が変わってくる。彼はその障害ゆえに、印刷所の仕事に採用されたのである。ちょっとした印刷ミスを瞬時に見つける特殊技能者としてだ。

②社会が彼らの能力を開発し、活用できていないということ

この「能力」については、２つの視点を理解する必要がある。まず１つ目は、障害者１人ひとりについて、その人独特の能力を発見できるかということだ。
企業の社会貢献セミナーで、事例発表者として招待された知的障害者の授産施設の長が、余談として「面白い知的障害の青年がいる」と言い出した。青年の挨拶の仕方に物凄い魅力があって、施設を訪れた客は、その挨拶に出会うとメロメロになってしまうほどだという。そこでセミナーに参加していた百貨店の社会貢献担当者たちに「この青年を、挨拶という仕事だけで雇用する気があるか？」と尋ねたら、ヒソヒソ話し合った後、「雇います」と言った。

そうなると、その人が障害者になるか、才人になるかは、社会のその人に対する見方や関わり方次第ということになる。未だに大部分の人が「障害者」と見られているということは、社会が彼らの能力を開発し、活用できていないということなのだ。

⑷サービスを水面下に隠す

都内のマージャン店に「賭けない麻雀の会」があって、ここに高齢者が沢山参加しているという。地域のサロンに参加している人も多い。これらはすべて、本人からすればデイサービスの役割を果たしているのだ。

①喉頭がんのリハビリにコーラスグループを選んだ

知人が喉頭がんの手術を受けた後、自宅に復帰。これからどこでどんなリハビリをしようかという時に、彼女は公民館のコーラスグループを選んだ。公民館では、ど

のグループが何のリハビリにいいといった情報が出回っているという。

公民館は、利用者にとってはリハビリセンターだった。ならば本物のリハビリセンターに行けばいいではないかと言いたいだろうが、住民はそうは考えない。福祉の匂いのしない、公民館のグループに行きたいのだ。ならば、そこでリハビリセンターが専門の立場からアドバイスをすればいいことだ。

人間は、人に助けてもらうということを、ミエミエの場でやられるのは嫌なのだ。そういうことは水面下でやってほしい。「福祉は隠し味であれ」と住民は言う。

②「福祉」を自分たちの生活や業務の一部に取り込む

福祉の営みの他に、社会にはいろいろな営みがある。様々な企業があり、公民館や消防署などの公共機関があり、学校があり、各種のグループがある。その他にも家庭生活が営まれているし、ご近所活動もある。それらの営みの中に、福祉という営みが隠されている、というのが理想なのだ。

言い換えれば、それぞれが「福祉」を自分たちの生活や業務の一部に取り込むということだ。当事者に見込まれた所、「やるべき」所が「やるべき」事をすればいい。福祉機関は、自分たちでやってしまわないで、それぞれの「やるべき」所に「やるべき」事をやらせていく。仕掛け人として専門性を発揮すればいいのだ。

⑸並みより遙かに高い水準のサービスを

①デイサービスの送迎車をリムジンにしてみたら

１つ実験してみたらどうか。デイサービスを運営している人なら、送迎用の車を、１日だけ、リムジンなどの超高級車にしてみるのだ。その日だけ借りて、何人かの付き人つきで運転してみる。そしてその時の利用者、職員、全員の反応を聞いてみる。私があれこれ説明するより、よほど理解が早いだろう。福祉が提供するサービスは、並みより若干下ぐらいのレベルでいいと思われているが、その真逆のやり方がじつは正解なのだ。

②福祉は本来、とてつもなく高いレベルのサービスでなければいけない

アメリカから始まった、余命が限られている子どもたちの夢を何でも実現しようという活動がある。ある子どもは望み通り、ディズニーランドに招かれ、行列なしでアトラクションを楽しみ、朝はミッキーマウスが「おはよう」を言いに来る。その結果、重度の障害を持つその子が起き上がってしまったという。

福祉というのは、本来はとてつもなく高いレベルのサービスでなければいけないのだと納得した。そしてそのサービスが実現すると、とてつもない効果が出てくる。

③他の人より上のレベルか、または違った道を選ぶか

（GREATHOUSE Labs より）

この写真を見ていただきたい。「火炎放射器付き車椅子」である。ほぼすべての地形に対応できる車輪を装備し、座席は海洋レスキュー隊のヘリのもので、４．５ｍの炎を発射することができる。

開発したランス・グレイトハウスさんは、兄がパーキンソン病になった時、「見るからに医療器具そのまま」の車椅子ばかりであることに疑問を抱き、「普通の男たちが羨むほどカッコいい」車椅子に乗せようと決心したのだ。

自分（や身内）が社会的弱者になった時、人は、２つの道のどちらかを選ぶようだ。１つは、普通の人よりも上のレベルで、もう１つは、普通の人とは違う道だ。この火炎放射器付き車椅子は、２つの道を同時に進もうとした。

④住民を反対派から応援団に逆転させた超高級福祉の店

障害者が働く「福祉の店」が開店するというニュースを見ると、私たちは、その店にある一定のイメージを描くが、同じ「福祉の店」でも、こんな店ならどうだろう。

京都府舞鶴市の高級フレンチ・レストラン「ほのぼの屋」。スタッフは統合失調症や知的障害、難病などを抱える人だが、「予約のとれない店」として人気を博し、年

間５０組のウェディングも手掛け、「一泊ディナー付きで１人２万円以上」のプチホテルも始めるなど、「福祉の店」の常識とイメージを覆す発展を遂げている。

建設前は地元住民の反発が強かったが、いざ完成した店で住民をもてなしたところ、一番反対していた男性がこう言ったそうだ。「こんなええもんができるんやったら、わし、反対せんかったのに！」（「ノーマネット」公開の西澤心さん（同店支配人）の講演録より）。地域の人にとってこの店は「誇り」になっており、海水浴客にも「高台におしゃれなフランス料理の店がありますよ」と教えているそうだ。

⑤超一流のシェフやホテルのインストラクターを動員

これだけ高いレベルの福祉をだれがどうやって実現させるのか。「普通」の人材と努力では駄目だ。舞鶴の店を実現させたのは、「支配人」である西澤心さんの並外れた情熱とパワーだった。舞鶴湾を一望できる一等地に、２億５千万円の建物、そしてグルメファンに名を知られた超一流のシェフを揃えた。従業員を指導したのはホテルの接客インストラクターだ。投入した人材等もまた「普通をはるかに超えたレベル」であった。

⑥福祉とは弱者と強者の戦いだ

しかし、と読者は言うかもしれない。要援護者を手厚く扱うのはいいとして、「普通よりも遥かに高いレベルの福祉」を提供するのは、ちょっとやりすぎではないか、「普通程度」でいいではないか。そんな高い福祉を提供しなければならないのにどんな合理的な理由があるのか、と。

⑦弱者が心休まるのは、普通の人よりも「高い位置」についたと実感できた時

人間は、善意やサービスを受ける立場に置かれた時、屈辱感を味わう。プライドの高い人ほど、味わう屈辱感は大きく、そのサービスのレベルが低ければ尚更だ。だか

ら私たちは、福祉サービスを受ける立場にはなりたくないと思っている。

その弱者が心休まるのは、「担い手よりも下位の位置に置かれた」と感じていた彼らが、ある種の仕掛けで、普通の人よりも「高い位置」についたと実感できた時である。

また、障害のある人が「並以下」の資源を与えられて、健常者と社会で対等に勝負できるだろうか。本当の福祉を実現するために必要なのは、普通よりも遥かに高いレベルの資源なのだ。

⑧超高質の資源を「ふんだくってくる」人が本当の味方

ところが私たち(福祉関係者も含めて)は、対象者が、自分たちよりも高い位置に上ることを快く思っていない。こうなると、福祉というのは、強者と弱者の戦いと見た方がいいかもしれない。社会から超高級な資源を「ふんだくってくる」人が彼らの本当の味方なのである。

そんな味方(庇護者)の支援を得て、 弱者が強者に戦いを挑んでいくのが、福祉という現象だと見ることもできる。だから担い手主導の福祉とは、強者の側からつくる福祉と言い直してもいい。

故・宮城まり子さんが肢体不自由児養護施設の園長として実行したのが、まさに庇護者の行動である。子どもたちが描く絵はプロ顔負けの素晴らしい作品だったが、それもそのはずで、超一流の画家の指導を受けていたのだ。また、超一流のダンサーも指導者として招き、子どもたちはブロードウェイでダンスを披露して喝さいを浴びた。弱者の庇護者の資格は、超一流の資源を確保できることである。その人たちによってはじめて「普通よりも遥かに高いレベルの福祉」が実現するのだ。

4.当事者が主導権を握るメリット

当事者が主役となって福祉課題にかかわってくると、どういう利点があるのか。

以下に、いくつか並べてみよう。

⑴今まで取り上げられなかったテーマに取り組まれる

今まで取り上げられなかったテーマ（当事者が願っていたこと）に当事者が取り組み始めるのではないか。たまたま理解ある関係者がいて、当事者のそうした意欲ある行動に乗ってくれれば、新しい種類の福祉活動が生まれ出てくるはずだ。

いま行われている活動は、担い手の側から見て無難なもの、やりやすいものばかりで、逆に担い手としてはあまり気乗りのしないテーマは、放置されてきた。それが劇的に変化してくるかもしれない。ここに紹介した写真は、北海道北見市で一人暮らしをしている下半身不随の女性（写真手前右）が、老人ホームに入所している人（左）を定期的に、しかも夫婦一緒に、地域への里帰りとして自宅に寝泊まりさせている事例である。お互いに、もともと縁もゆかりもない同士だ。

受け入れた本人は脳梗塞で下半身が不自由になり、車椅子の一人暮らしになったにもかかわらず、「私は自宅で暮らしたい」と言って、病院が引き留めるのを振り切って退院してしまった。それを民生委員（写真後方）が後押しした。一人暮らしで、しかも車いすの生活なのに、彼女は自宅を要援護者たちのサロンの会場にも開放している。仕掛け人はやはりこの民生委員だ。当主の生活全般も含めて、これらの活動には近隣の人たちの日常的な支援があるようだ。

担い手主導で考える福祉関係者から見ればかなりハードルの高い活動に見えるが、彼女等にはそうでもない。当事者同士で意気投合した結果、あっさりこんなことができてしまった。

⑵レベルの高い福祉が実現する

この実践を、もっと発展させたら、どういうことができうるか。例えば、この家が老人ホームの人たちの里帰りの受け皿になるかもしれな

い。この家を拠点にして、さらに地域のサロンとか、買い物とか、趣味活動への参加が実現するかもしれない。里帰りからさらに発展して、この家を拠点にして、要介護でも豊かに生きられる地域づくりを彼女らは始めるかもしれない。

そうなると老人ホームは、いったん入居したら永久に外へ出られない場所ではなくなる。いつでも彼女の家を足場にして、どんどん地域へ出ていくことができる。老人ホームの持つ意味が、いずれ変わっていくのではないか。

⑶活動は面白いように発展していく

今私がやってみたように、これまでにない新しい活動は、頭の使い方次第で、いくらでも発展していく可能性に富んでいる。なぜか。今まで担い手主導の福祉では、このような活動には蓋がされていたから、いったんその蓋を開けると、いくらでも発展していくのだ。

⑷いろいろな当事者が助け合って活動はさらに発展する

お互いが当事者なので、気持ちは１つ。願っていることは、お互いがよくわかる。だから意気投合しやすい。それぞれが要援護者なのに、彼らが協力し合うことで、多様な、しかも高レベルの活動ができている。

⑸自分の願いを実現したいから本気で支援者を探す

担い手主導だと、活動に必要な人材を探すのが一苦労という場合が多いが、当事者主導だと、自分の問題を解決したり、願いを実現するために、本気で支援者を探そうとする。それだけ人材を確保しやすいということだ。

その人が抱える問題や資源を一番よく知っているのは当事者であり、その当事者が自身の問題解決に最適の人材を探そうとするので、極めて効率的である。

⑹当事者を活動の人材として計算できる

担い手主導の福祉だと、受け手をただサービスを受けるだけの役割に固定させようとするので、福祉の資源にはなり得ないが、当事者主導になると、まず当事者が先頭に立って活動することになるから、当事者も有力な資源になる。資源として計算できるのだ。

あらためて考えてみれば、当事者を、サービスを受けるだけの立場に固定してしまうというのは、こんな非効率なことはない。文明的手法は効率が最大の目的だが、意外に非効率な手法と言える。

⑺福祉ニーズが表面に現れる

今の福祉関係者の悩みとは何かを考えてみよう。それは「ニーズが現れない」ということだろう。ところが当事者主導だと、本人が表面に出て、しかも積極的にニーズをアピールするので、「ニーズが見えない」などと嘆く必要はなくなる。

⑻プライバシーの侵害などと言われなくて済む

福祉活動での悩みと言えば、たとえば当事者宅に踏み込むと、「プライバシーの侵害だ」と言われる。だからなかなか家に踏み込めないし、当事者の情報も集めにくい。しかし当事者主導なら、当事者自身がその問題の解決を求めて自分をひらいていくことになるし、必要な情報も本人が提供するから、プライバシーの問題がクリアできる。

⑼活動で事故が生じた場合の責任問題もクリア

隣人に車の送迎をお願いする場合も、万一事故が起きても、お願いした側の自己責任という暗黙のルールができている。何か事故が生じたときに担い手側があれこれ悩まなければならない事態は防げる。

⑽小さな自分事から大きな自分事へ発展

当事者が主導して問題解決に取り組むということは、当事者自身の問題に取り組むだけでなく、もっと広く、同じ種類の問題を抱えた人のことも併せて考えることも求められる。それができる下地もある。

たとえば小学生の子を持つ父親が一念発起し、朝の通学時に、交通安全のための旗振りを始めた。といっても、わが子のためである。わが子は可愛い。事故に遭わせてはならない。だがその活動を続けるうちに、彼は、他の子たちのための安全も守らなくてはと、考えを改めた。小さな自分事から大きな自分事へ、視野を広げたというわけだ。

当事者が主役になる最大のメリットは、当人にとっては他人ごとではない、だからぜひとも解決したいと思う。と同時に、同じような立場にいる他の人たちのことも、解決してあげたいと思うことだ。

息子をバイク事故で失ったある父親の活躍がマスコミに注目された。ドライブレコーダーが普及していなかった当時、裁判で長男の側に過失があったとされた父親は納得がいかず、もしドライブレコーダーが装着されていたら、という強い思いを抱いた。そこで自身、電機メーカー勤務の経験を生かし、事故原因の分析を手がける民間企業と一緒に開発に取り組んだ。そしてトヨタ自動車の株を取得し、株主総会で「ドライブレコーダーの全車標準装備」を訴え、「前向き」の検討を勝ち取った。これまた、小さな自分事から大きな自分事への発展形態といえる。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷１４７６－１
TEL049-294-8284
kiharas@msh.biglobe.ne.jp
http://juminryu.web.fc2.com/